

"知識には限界があるが、想像力は世界を包み込む"

かの有名な科学者アルバート・アインシュタインは、1929年サタデーブニングポスト誌の取材のなかで、「つまりあなたは知識よりも想像力に頼られているのですね」と問われると、「私は想像力を使って自由に絵を描く芸術家と言ってもよいでしょう。想像力は知識よりはるかに重要です。知識には限界がありますが、想像力は世界を包み込みます」と回答しています。

確かに、知識には限界があります。私は今そのことをはっきりと理解しています。それはここ1年で2度日本を訪れたなかで気づいたことです。オランダと日本は、人口密度、教育レベル、勤労意識、高度な科学技術、充実した医療、高齢化社会などの面において多くの共通点があります。農業に関しても、家族経営が主流であること、強固な協同組合、肥沃な農地、高い農地価格など、多くの類似点があります。それではなぜ、国連商品貿易統計データベース(UN Comtrade)発表の2014年数値によると、オランダの農産物輸出額は輸入額より53%大きいのかに対し、日本は農産物輸入額の方が輸出額に比べ、1,488%も大きいのでしょうか。その答えを求めて、色々な面から分析を試みられるでしょう。オランダの国民1人あたり耕地面積(1,099㎡/人)は日本のそれ(359㎡/人)の3倍と大きいことが、日本の輸入額の大きさを説明するひとつかもしれません。しかし、だからといって、先ほど指摘した極めて大きな差を説明することはできません。

それでは、これほどの大差があることをどう説明すればよいのでしょうか。明らかにオランダの農業の方が日本よりも生産性が高いのです。しかしなぜでしょう。気温あるいは生育環境の違いでしょうか。もしくは、日本の農業が地震や台風等、自然現象の影響を被るからでしょうか。おそらく、こうした理由は大きなパズルのピースの一部ですが、それ以外にもたくさんのピースがあるはずです。

例えば、農産物や農業労働力の市場構造の違いが挙げられるでしょう。ヨーロッパ連合(EU)はオランダの農産物にとって確かに大きな市場ですが、日本には巨大な国内市場があり、人口は減少しているものの、国産農産物へのシフト等を促せられれば、成長する余地があるはずです。オランダ農業の生産性は、第二次

世界大戦後急速に高まりましたが、その他の産業分野で労働力が必要とされたからです。日本の近代化もまた強力に推し進められてきましたが、地方には多くの農業者が離農してもまだ十分なほどの農業労働力が残されていたのでしょう。

さて、これくらいで現状についてあり得そうな説明は十分ですね。現在求められていることは、日本の農業の生産性を高めるためにどうすべきかということです。どのような対策が講じられるべきでしょうか。知識には限界がありますから、そろそろ想像力を取り入れていきましょう。

私の夢の中では、世界における食農セクターのショーケースとなるよう、日本とオランダ双方の政府、企業、研究機関が共通の目標を掲げて緊密な協力プロジェクトを推進しています。私には日本とオランダが柱となって世界を包含する「黄金の三角形」が見えています。オランダが日本の生産性を高めることを支援し、日本がオランダに美味しく、健康に良いといった魅力的な付加価値を持った農産物の栽培およびマーケティング方法を伝授するのです。このように日本とオランダが力を合わせて、お互いのノウハウを共有していく。そうすることで、両国の食農セクターが競争相手に一歩先んずることができるでしょうし、国民も（食農セクターを）応援してくれるでしょう。また、食農セクターで働きたい若者へ将来の展望を示せますし、「都市農業」のような新たなビジネスチャンスを見出すことなくしっかりとモノにしていけるでしょう。

そして夢から目を覚ますと……幸せな気分です。というのも、私の夢が本当に現実のものとなるのが分かっているからです。実際のところ、農林中央金庫とラボバンクとの戦略的パートナーシップ、そしてワーヘニンゲン大学研究センター(WUR)と宮崎産業経営大学が交わした覚書で、すでに重要な前進がいくつか遂げられています。私は近い将来ますます発展することを確認し、期待しています。ともに夢を実現させましょう。

(ワーヘニンゲン大学研究センター(WUR) 主任研究員,

宮崎産業経営大学客員教授 ヨス・ファーステーヘン(Dr. Jos Verstegen))

(本稿は、(株)農林中金総合研究所の責任において翻訳・編集したものである。)